氏　名（本籍）	加藤大祐（かとうだいすけ）
学位の種類	医学博士
学位記番号	医第396号
学位授与年月日	昭和42年12月21日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
最終学歴	昭和33年3月 福島県立医科大学卒業
学位論文題目	設定された無脱臼地帯における先天股脱の自然治癒ならびに治療治癒に関する研究

（主　査）

論文審査委員　教授　飯野三郎　教授　横　哲夫

教授　葛西森夫

論　文　内　容　要　旨

生天股脱の対策として脱臼またはその準備状態の早期発見，さらにそれらに対するその後の指導処置や治療，一旦治療終了後の関節変形発生状況等を詳細に検討，管理してゆくことは，医学的にも社会的にもきわめて重要なことは明らかである。しかしこれには長年月のたゆまざる，かつ広範な医学的観察を要し，このためには整備された地域保健機構がなくては不可能事に近いといえよう。著者は，すでに先人の業績により宮城県白石市という小都市が，1つの地域保健機構の単位として上記の問題がほぼ解決され，無脱臼地帯（脱臼のない町）となつていたので，そこでおこなわれてきた上記の先天股脱対策の検討を著者自身の経験を通して改めて吟味を加え，2，3の新しい知見を得た。その概略を述べると，昭和33年より昭和37年まで5年間の白石市における出生数3,851名中，生後1ケ月以内に死亡した77名を除く3,774名に対し，毎月生後1～2カ月児を対象に先天股脱早期発見のためのX線検診をおこない受診した3,061名(81.9%)の乳児より，521例・914関節の先天股脱準備状態を発見した。この異常関節は発見後経時的に行なわれた経過観察と療育環境指導において6～9カ月までに84.6%が自然治癒した。残りの5.8%はその経過観察中準備状態が改善されないまゝ経過し，9.6%が悪化を示し脱臼へ発展する傾向を示した。この悪化傾向全例88関節と，改善されない例中の22関節に対しては，6カ月ないし9カ月までに非観血的治療を開始し，治療後も追跡した。また治療しなかつた自然治癒例および上記非改善例に対しても満5才を前後に予後調査をおこなつた。これらの予後調査や追跡はすべてX線直接撮影によつておこない，乳児期の像と，その後の経過，治療内容，予後を検討した。まず乳児期経過についてみると，1）自然治癒傾向は両側例より片側例に大である。2）自然治癒傾向は女児より男児に大である。3）乳児期経過中亜脱臼の要素の方が臼蓋形成不全の要素に対し脱臼形成に重大な意義をもつている。しかし臼蓋形成不全と亜脱臼の合併例がもつとも脱臼形成に影響している。この合併例の臼蓋形成不全は亜脱臼によつて惹起された2次性のものと考えられ，臨床的には亜脱臼，病理学的には関節自体に存在する脱臼性を重視すべきであるとした。4）2ケ月児検診被検者総数3,061名に対し，実際に治療を必要とした症例は59名1.93%であり，これが狭義脱臼発症数と推定される。

つぎに遠隔成績を決めるにあたり，満6才正常児100関節のCE角分布を調べたが，99%の信頼限界は23.6°～26.9°（平均値25.4°）を示した。CE角は大腿骨頭の位置の表示としてはかなり有効であるが，関節の変形を表現できず，そのための判定基準をつくり，正常，a，

b，c，d，eと分類した。正常，とaは解剖学的治癒を意味し，b，c，d，は機能的治癒とみられるものでその程度の順列による分類，e，は機能の不全を意味している。この判定分類によつて遠隔成績（関節数）をみると，乳児検診で発見した準備状態児の自然治癒および治療治癒したものの遠隔成績は，正常・86.92％，a・5.51％，b・3.79％，c・1.72％，d・2.06％，e・0.00％であり，約90％は解剖学的治癒であり，残りはすべて機能的治癒を示し，機能不全を示したものは1名もなく，よい成績を得たことになる。他の2，3の報告とCE角のみについて比較してもよい成績を示している。昭和40年，41年度の白石市新入学児童に対する検診において，先天股脱で機能障害をおこしているものが1名もいなかつたこともこれを裏づけるものである。乳児期に示した準備状態児の推移は，治療，非治療の如何を問わず，遠隔成績ときわめて関係深い結果を示し，先天股脱のもつ個体差すなわち悪性度というようなものを示唆した。

治療症例については治療内容を検討してみたが，当時はほとんどがギプス治療が主体で比較ができなかつたが，観血的整復例は1例もなく，治療症例のみについての他の報告との比較においてもよい成績を示した。

先天股脱の治療成績は治療方式のみの比較もさることながら，その症例の把握状態，さらに治療中の管理，治療技術，変形予防に対する検討等，複雑な問題にその重要な鍵が秘められており，白石市における無脱臼地帯の組織運営は完全とはいえないまでも，理想的に近い対先天股脱の効果を得たと結論される。

審　査　結　果　の　要　旨

本論文は多発する先天股脱の社会医学的対策として１つの地域保健機構単位を設定し，脱臼またはその準備状態の早期発見，さらにそれらに対するその後の指導処置や治療，一旦治療終了後の関節変形発生状況等を詳細に検討吟味したものであつて，この「無脱臼地帯」（白石市）における昭和３３年より昭和３７年まで５年間の出生数３,８５１名中，生後１カ月以内に死亡した７７名を除く３,７７４名に対し，ｘ線検診をおこない受診した３,０６１名（８１.９％）の乳児より５２１名，９１４関節に先天股脱準備状態を発見している。問題はこれら一応異常と認められる関節の経時的推移で，経過観察と療育指導において６～９カ月までに８４.６％が自然治癒し，５.８％は改善されないまま経過し，９.６％が悪化を示し脱臼へ発展する傾向を示した。この悪化傾向全例と，改善されない例の一部に対して非観血的治療を行ない，治療後も追跡し，また治療しなかつた自然治癒例および上記非改善例に対しても満５才を前後に予後調査をおこなつて重要な所見を得ている。たとえば自然治癒傾向は両側例より片側例に大であり，女児より男児に大であり，悪化傾向については乳児期経過中亜脱臼の要素の方が臼蓋形成不全の要素よりも脱臼形成に重大な意義をもつているごときである。

著者はさらに遠隔成績を決めるにあたり，満６才正常児１００関節で調べたＣＥ角分布を参考にして判定基準をつくり，正常，ａ，ｂ，ｃ，ｄ，ｅと６段階に分けて検討した結果，乳児検診で発見した準備状態児の自然治癒および治療治癒したものの遠隔成績は，正常・８６.９２％，ａ・５.５１％，ｂ・３.７９％，ｃ・１.７２％，ｄ・２.０６％，ｅ・０.００％であり，約９０％は解剖学的治癒，残りはすべて機能的治癒を示し，機能不全を示したものは１名もなく，著者らの意図した無脱臼地帯の構想は一応医学的の裏付けを得たことになつた。

以上により，本論文は十分学位に値する研究内容を包含するものと認める。